

時空をつなぐ

要衝



本誌は本号より、最新の経済・経営情報に地域文化や歴史情報を加え、装いも新たに内容をさらに充実して、地域総合情報誌「かけはし」として新しく発刊いたしました。題字は、滋賀県在住の書師・秀蓮さんに、琵琶湖にかかる虹をイメージし、本誌が当行とお客さまとの「希望のかけはし」となることを祈念し揮毫いただきました。皆さまには、新しく生まれ変わりました「かけはし」を、末永くご愛顧いただきますようお願い申し上げます。

先日、ふと立ち寄った書店で一冊の本を手に取りました。京都府出身の文学博士・今谷明著『近江から日本史を読み直す』（講談社現代新書）です。

本書は、継体天皇誕生から大津宮、紫香樂宮への遷都、比叡山延暦寺の開創、戦国武将の天下統一に向けた動静や明治の大津事件など、日本史を近江から捉え、文学博士としての幅広い知見と緻密な現地取材により考証されています。

特に、脚光を浴びることが少ない中古・中世（平安・鎌倉・室町時代）は、延暦寺の興隆や宗派の争い、近江商人の発祥に加え、現代に伝わる古刹や仏像、伝統文化などの成り立ちが、甲賀大工など市井の人々の活躍とともに詳細な筆致で記述されており、新たな発見に胸が躍りました。

今谷氏は「近江は、古くから地政学上の要の位置にあり、近江史を書くことは日本通史を著すのと同義である」とし、湖国が交通の要衝だけではなく、政治・経済・文化など、日本史の表舞台として重要な役割を担ってきたと述べています。また、一大

交通機能として物資の輻輳を可能にした琵琶湖の存在が、進取の精神に富む近江人の気風を育んだ、とも指摘しています。

近江商人の「三方よし」の精神は、近江が日本の東西を結ぶ交通・交易の拠点であったことや延暦寺の「忘己利他」の思想に影響を受けたように思います。また、時の権力者に翻弄されながらも、強く、しなやかに生き抜くことで、近江商人のバイタリティーが醸成されたのではないかと考えます。

現代においても滋賀県は、日本の東西を結ぶ交通、物流の要衝となっており、多くのグローバル企業のマザー工場や研究開発拠点、大学などの学術拠点が集積しています。また、満々と水を湛える琵琶湖や緑豊かな山々などの自然に恵まれるとともに、多くの国宝・重要文化財が近代的な町並みの中で息づくなど、先人から引き継がれた歴史遺産や文化、精神と共生しています。

湖国は、まさに「時空をつなぐ要衝」です。常に歴史の覇者が通り過ぎる「回廊」で、近江人は進取の精神を発揮し、強かに生き抜き、そして社会を創り上げてきました。そして、この「要衝」に生きる私たちは、時代の変化に柔軟に対応し、弛みない変革で新たな時代を築き上げていく大きな役割を担っているのではないかと思います。

欧米にみられる新たな保護主義的な潮流や日本における人口減少社会の本格化など時代の大変革期を迎えている昨今、先人の偉業と「時空をつなぐ要衝」としての役割に思いを致し、新たな未来の創造に向けて、失敗を恐れず、積極果敢に挑戦していかなければならないと、改めて心した次第です。